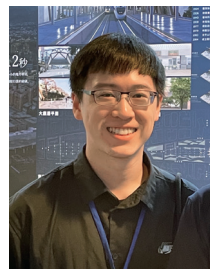


● シリーズ 私の見た日本 Vol.232

美意識と建築教育

馬 品霽 (マ ピンチ)

2000年台湾台南市生まれ。2023年台湾科技大学卒業、2024年北海道大学大学院空間性能システム専攻建築設計研究室 入学。現在に至る



幼少期から家族旅行で頻りに日本を訪れていたこと、そして母がインテリアデザイナーであったことも影響し、日本を訪れるたびに旅程の半分以上が建築見学で占められていた。そのため、学業の早い段階から日本で建築を学ぶことを決意し、大学卒業の年には日本語能力と日本の建築教育に必要な知識を補った。

日本留学前にはすでに約30回日本を訪れ、沖縄を除くほぼすべての都道府県を巡ってきた。現在は北海道で学んでいるが、最も憧れている都市は京都である。京都を好む理由は多くの人と似ているかもしれないが、生まれ育った台湾の台南という街との共通点も大きい。歴史ある都市が持つ独特の「誇り」を感じることが出来る点に惹かれているのかもしれない。京都の老舗が持つもてなしの哲学や競争意識は、台南出身の自分にとって非常に共感できるものである。京都の街並みや建築を言葉で表すならば、「伸縮自在」あるいは「柔軟な適応力」といった表現がふさわしいだろう。数百年前に計画された街路のなかに、時代を超えて存在する「古くても新しい」「新しくても落ち着いた」建築が点在し、これらの街並みを歩くことが京都を訪れるたびに最も楽しみにしていることである。

半年ほど学業と試験の繰り返しの日々を過ごした後、札幌の北海道大学へ進学し、修士課程の生活をスタートさせた。そして、日本の建

築教育に強い衝撃を受けた。台湾の大学では、建築学科の学生は1年次から専門知識を学び、設計課題を中心にカリキュラムが組まれている。一方、日本では1年次は一般教養科目が中心であり、建築に関する本格的な学習は2年次から始まる。3年次にはCADやCGソフトの技術を習得し、4年次には卒業設計や卒業論文に取り組む。短期間でありながらも、その成果物の完成度の高さには驚かされる。日本の教育システムと文化が、この効率的な学習プロセスを支えているのであろう。

日本で建築を学び、将来的には日本で働きたいと考えている以上、避けて通れないのが「就職活動」、いわゆる「就活」である。建築系の修士課程に在籍する学生の多くは、修士1年前期にインターンシップに参加し、能力次第ではその期間中に早期選考へ進み、内定を得ることが出来る。しかし、多くの学生は修士1年後期に各企業の本選考へ参加し、翌年の3月頃までに内定を獲得するのが一般的である。この就活は日本独自の文化であり、台湾出身の自分にとって最初は馴染めず、大学院に進学したにもかかわらず大半の時間を就活に費やすことに違和感を覚えた。しかし、日本社会の一員として働く以上、この文化に適應する必要があると考え、受け入れることにした。

研究室では唯一の外国人であり、最初は日本語の壁に苦労した。日本人の学生たちは外国人に対して話す速度を調整することはなく、最初は会話についていくのに必死であった。しかし、その環境に身を置くことで次第に慣れ、今ではそのおかげで日本語の聴解力と会話力が鍛えられたことを感謝している。

研究室では北海道の大樹町での建築プロジェクトに参加する機会を得た。これは自身にとって、実際に建設される可能性のあるプロジェクトに携わる二度目の経験であり、最初の経験は台湾での住宅設計のインターンシップであった。しかし、大樹町のプロジェクトはその規模が格段に大きく、建築がどのように計画され、照明・色彩・建材の選定に至るまで議論されるかを間近で学ぶことができた。

日本の大学では学部4年次に「卒論」を執筆する必要があり、その影響で学部生も研究室に配属され、修士の学生とともにプロジェクトに関わる人が多い。建築学科の学生にとって、4年次は最も充実し、最も多忙な一年であると言えるだろう。

建築の世界に足を踏み入れてからすでに5年が経過し、日本に来てまだ1年ではあるが、さまざまな活動や授業を通じて、日本の建築産業の発展とその緻密さに衝撃を受けている。例え



みるる那須塩原図書館



国立新美術館



東京国際フォーラム

ば、学会。昨年、関東の建築学会大会に参加する機会を得たが、その参加者の多さに驚かされた。わずか4～5日間の間に、数千人もの研究者や実務者が論文や作品を発表し、企業の代表として研究発表を行う社会人の姿も見られた。また、多くの台湾人が日本を林業大国・木造建築大国として認識しているが、修士課程で木質建築を学び、日本もかつては台湾と同様に過剰伐採を経験し、木造建築を禁止していた時期があったことを知った。現在、建築基準法の改正やカーボンニュートラル推進の流れのなかで新たな木造建築のブームが巻き起こっている。LVLやCLTといった大断面集成材を用いた大スパン建築や高層ビルは、台湾の建築関係者にとって羨望の的である。

学業以外では、日本各地を旅行する際にカメラを手に取り、お気に入りの風景を探すことを楽しんでいる。これは、自分にとって建築との距離を縮める最も手軽な方法であり、訪れる都市ごとに興味深い建築を探す習慣がある。必ずしも著名な建築家の作品である必要はなく、小さなカフェが驚きを与えてくれることもある。そして、これらの建築が都市をより深く探索するきっかけになることも少なくない。建築の世

界に入って以来、都市や建築の細部に目を向けるようになった。庇の仕上げ、壁面の素材、階段の構造など、これらのディテールに気づくことが「建築を体験する」楽しみの一つとなっている。建築が街区環境に与える影響から、細部の積み重ねによる建築美学まで、すべてが自身のデザイン思考に影響を与えている。そして、日本の施工品質には常に感銘を受ける。例えば、トイレのタイルの目地合わせ。特に高級ホテルでは、不揃いなタイルを見つけることが難しい。また、工事現場の清潔さも特筆すべき点である。台湾では施工の細部が軽視されることが多く、その結果として施工不良が発生しやすい。日本が数百年前から築き上げてきた大工文化や職人精神は、今日の建築産業の発展に大きく寄与している要因の一つである。美学に関しても同様であり、現在の日本は世界において圧倒的な美的感覚を誇り、「和」の独自性を持つ美意識を発信し続けている。それはデザイン界にも大きな影響を与え、多くのデザイン原則に影響を及ぼしている。

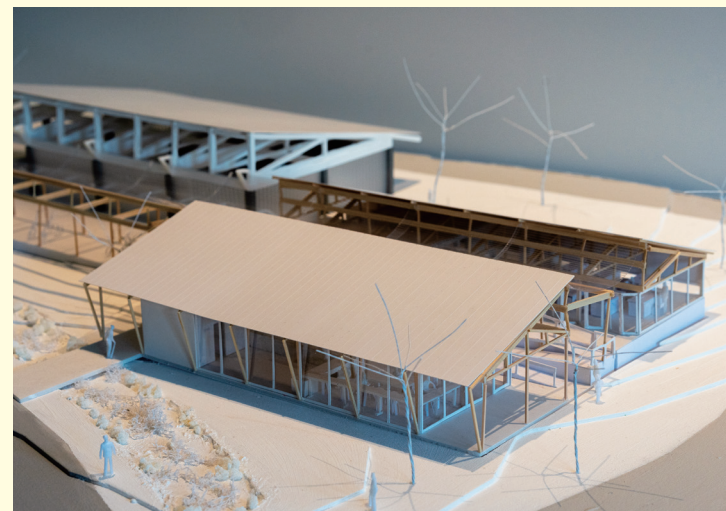
では、なぜ日本にはこれほどまでに高い国民の美的素養があるのか。考えられる理由の一つは、社会全体がデザインや美術に関わる職

業を尊重していることにある。創作を生業とする者がその才能によって生計を立てることができ、さらにその創造性が社会において自由に尊重される環境があれば、芸術は自然と広がり、競争が生まれ、発展していく。その結果、社会全体が美を日常的に享受するようになり、「生活の中に美が不足しているのではなく、それを見つける力が不足している」という段階を超え、むしろ「生活の至る所に美が溢れている」と感じるまでに到達しているのである。

これまでの日本での経験を通じて、建築に限らず、さまざまな価値観や考え方を学びたいと考えている。日本から学ぶだけでなく、台湾にも共有できる知見は多くある。建築の世界に少しでも貢献できるのであれば、それは続けていく価値があると確信している。



江之浦測候所



修士設計演習課題 模型写真



セントラル硝子国際コンペ模型写真